

第 32 回クラシックを楽しむ会

2016 年 5 月 22 日 (日) 18:00～ (3 時間 9 分、休憩除く)

歌劇「タンホイザー」(ワーグナー)

会場等：メトロポリタン歌劇場

1982 年 11 月 22 日・12 月 20 日

パリ (ウィーン) 版による上演

演奏：メトロポリタン歌劇場管弦楽団 & 合唱団

バレエ：メトロポリタン歌劇場バレエ団

指揮：ジェイムズ・レヴァイン

演出：オットー・シェンク

美術：ギンター・シュナイダー・ジームセン

衣装：パトリシア・ジプロット

出演：リチャード・キャシリー (T: タンホイザー)

エヴァ・マルトン (S: エリーザベト)

ベルント・ヴァイクル (Br: ヴォルフラム)

タティアナ・トロヤノス (Ms: ヴェーヌス)

ジョン・マカーディ (Bs: 領主ヘルマン)

その他



第 2 幕「大行進曲」とともに貴族達の入場、いよいよ歌合戦



キャシリー



ヴァイクル

ものがたり

中世のドイツ、タンホイザーは領主の姪エリーザベトと清き愛で結ばれていたが、ふとしたことから愛欲の女神ヴェーヌスが棲む地底のヴェーヌスベルクに赴き、官能と快楽の世界に溺れていた。純潔の処女が自己犠牲によって愛する男性を救済するという物語。



トロヤノス



マルトン

名曲

有名な**序曲**は劇中の旋律を巧みに用いてオペラ全体の内容を見事に表現※。第 2 幕の**大行進曲**「歌の殿堂を讃えよう」、第 3 幕の**巡礼の合唱**「故郷よ、また見る野山」はオペラの合唱曲中最も有名な曲の一つ。そして**「夕星の歌」**はワーグナーのアリア中最高のアリアとされる。

※序曲は A・B・A' の三つの部分から成る。A は「巡礼の合唱」と「悔悟の動機」の旋律で巡礼たちの敬虔な世界を表し、B で「ヴェーヌスの動機」と「誘惑の呼び声」、および「ヴェーヌスを讃える歌」の旋律でヴェーヌスベルクの官能的な世界を表す。A' で再び「巡礼の合唱」の旋律が、最後は「救済→信仰の力による勝利」を予告して終わる。「パリ」版では続けてヴェーヌスベルクの「バッカナル」が演奏される。

第 33 回クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル：歌劇「アイーダ」(ヴェルディ)

6 月 19 日(日) 17 時 30 分開場、18 時上映開始

1981 年のサンフランシスコオペラ。パヴァロティ全盛期のラダメスと豪華な舞台は必見！アイーダ役はマーガレット・プライス。指揮はガルシア・ナバロ。この 4 月に引退を表明したレバインの若々しい指揮ぶりも・・・7 月は「愛の妙薬」、8 月以降、「ドン・ジョバンニ」、「トゥーランドット」など新演出の名作の他、これまで上映した人気演目の再演も予定。

あらすじ

【時と場所】 13世紀初め、ドイツ中部テューリンゲン地方。

アイゼナハのヴァルトブルク城とその周辺、近郊のヘルゼルベルク（ヴェーヌスベルク）の洞窟

【主要人物】

タンホイザー	テノール	騎士でミンネゼンガー*
エリーザベト	ソプラノ	領主ヘルマンの姪
ヴェーヌス*	メゾソプラノ	ヴェーヌスベルクに住む快樂の女神
ヴォルフラム	バリトン	タンホイザーの親友の騎士でミンネゼンガー* エリーザベトをひそかに愛している
ヘルマン	バス	テューリンゲンの領主

【第1幕】ヴェーヌスベルクの洞窟、ヴァルトブルク城を望むテューリンゲンの谷間

ヴェーヌスの膝枕で目覚めたタンホイザーは豎琴を手に愛欲の女神を讃える歌を歌うが、故郷を思い出して戻りたくなる。ヴェーヌスの誘惑を振り切って聖母マリアの名を呼ぶと、ヴェーヌスベルクは轟音を立てて消え去る。

タンホイザーが気づくとそこはヴァルトブルク城近くの谷間。羊飼いの歌*が聞こえ、巡礼の合唱とともに、領主ヘルマンや親友の騎士ヴォルフラムらが通りかかりタンホイザーを見つけて喜ぶ。ヴァルトブルク城に戻るよう勧めるが、官能の世界に溺れた罪を思うタンホイザーは断る。しかしヴォルフラムは領主の姪エリーザベトが彼の帰りを待っていると説得。タンホイザーは皆に感謝し「彼女のもとへ」と声をあげる。

【第2幕】ヴァルトブルク城の大広間

エリーザベトはタンホイザーが戻って歌合戦に参加することを喜びアリア「貴き殿堂よ」を歌う。そこへヴォルフラムとタンホイザーがきて再会を喜び合う。

「大行進曲」とともに騎士や貴婦人たちが入場、領主とエリーザベトが席に着いて歌合戦が始まる。お題は「愛の本質」。ヴォルフラムは「貴き集いを見渡せば」と清らかな愛を歌い、タンホイザーは享樂の愛こそ本当だと説く。他の騎士達はみなヴォルフラムの側に立つ。タンホイザーは享樂の愛に固執し、ついには「ヴェーヌス讃歌」を歌いだして禁断のヴェーヌスベルクにいたことが露見。激怒した騎士たちは剣を振りかざすが、エリーザベトはタンホイザーをかばう。領主はタンホイザーにローマへの巡礼を命じ、タンホイザーは教皇の赦しを得るためローマ巡礼の旅に出る。

【第3幕】ヴァルトブルク城を望むテューリンゲンの谷間

秋も深まった頃、ヴァルトブルク山麓のマリアの像の前でエリーザベトは跪いて祈っている。そこに巡礼者たちが「巡礼の合唱」を歌いながらローマから戻ってくる。エリーザベトはその中にタンホイザーの姿を探すが見つからず、気落ちして去っていく。見送るヴォルフラムは、彼女の死を予感し、「夕星の歌」を歌って、清らかな天使となる彼女をやさしく迎えてくれるよう、宵の明星（金星、ヴェーヌス）に祈る。

一人残されたヴォルフラムの前に檻樓をまとったタンホイザーが現れる。彼は幾多の苦難を乗り越えてローマに到着し教皇に赦しを乞うた「ローマ語り」を物語る。教皇は「私の杖が二度と緑に芽吹くことがないように、ヴェーヌスベルクへ行ったものは永遠に救済されない」と破門を宣告したという。

絶望のあまり自暴自棄になったタンホイザーの前にヴェーヌスが姿をあらわして手招きする。ヴェーヌスへ引き寄せられていくタンホイザー。そこへエリーザベトの葬列が近づいてくる。タンホイザーはエリーザベトの名を呼んで我に帰るとヴェーヌスは消え去る。ヴォルフラムが、エリーザベトが自分の命と引き換えにタンホイザーの赦しを神に乞うたことを話すと、タンホイザーはエリーザベトの亡骸に身を投げて息絶える。そこへローマからやってきた巡礼の手に、緑に芽吹く教皇の杖が掲げられ、タンホイザーの魂は救われる。巡礼たちの合唱（ほめたたえよ、恩寵の奇跡を）が響きわたる。

*補足説明

ヴェーヌス（ドイツ語）はヴィーナス（英語）のこと。ローマ神話ではウェヌスでギリシア神話のアプロディーテー。キリスト教世界から見ると異教の女神である。

ミンネゼンガーは中世ドイツで、叙情詩、特に騎士道的恋愛詩を歌っていた宮廷騎士歌人。「吟遊詩人」の訳は不正確。

羊飼いの歌（女神ホルダの歌）について、ワーグナーは「ホルダはヴェーヌスのゲルマン的変名」と言っている。

原作について

歌劇「タンホイザー」の正式名称は「タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦〜3幕よりなるロマン的オペラ〜」。ワーグナーは、中世の詩と「タンホイザーとヴェーヌスベルク」伝説、同じく中世の「ヴァルトブルクの歌合戦」伝説および史実などを結び付けて新たな伝説を創作し、みずから台本を作成した。

「タンホイザーとヴェーヌスベルク」伝説

タンホイザー(1245?-65?)は実在の人物で 13 世紀に**ミンネゼンガー**として各地を渡り歩き、ウィーンのバーベンベルク王朝フリードリッヒ 2 世に遣えたという記録が残っている。あまり詩才があるでもなく、放蕩三昧な生活をしていたようである。この事実をもとに 15 世紀に伝説が作られた。この伝説ではタンホイザーは恋の快楽を知ろうと**ヴェーヌスの洞窟**に 1 年間こもり、のちに聖母マリアに助けを求め、悔改の生活に入ろうとしてローマ教皇に懺悔する。しかし教皇は自分のもつ枯れ木の杖に葉が生えぬ限り救済はないと宣告したため、タンホイザーは悲しみつつ聖母マリアに別れを告げ、再びヴェーヌスの下へ帰っていく。ところが 3 日後に教皇の杖に緑の芽が吹いたので、教皇は手を尽くしてタンホイザーを探したがみつからなかった。

「ヴァルトブルクの歌合戦」伝説

13 世紀の伝説でヴァルトブルクの歌合戦が歌われている。この伝説では 1206 年に**チューリンゲン方伯ヘルマン 1 世**侯の宮殿で、実在の**ミンネゼンガー**である**ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ**や**ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ**達が歌合戦を行ったとされる。負けたものは命を失うという歌合戦において、**ハインリッヒ・フォン・オプターディンゲン**という詩人はオーストリア公爵の徳を讃えて歌うがチューリンゲン方伯を賛美するヴォルフラムらの歌に圧倒される。窮地に立ったハインリッヒは方伯夫人ゾフィーにすがって命乞いをし、ハンガリーの詩人であり魔術師の**クリンゲゾール**を呼んで審判をさせ、魔法の力で勝利を得ようとするが、クリンゲゾールの相手となったヴォルフラムが魔法の謎をあばき彼をしりぞける。なお伝説によるとこのクリンゲゾールはハンガリーの**エリーザベト**姫の誕生を予言している。この姫が実際に 1207 年に生まれ、歌合戦が行われたと思われる年を結び付けたのかもしれない。

「聖女エリーザベト」伝説

実在した**エリーザベト** (1207-1231) は東ローマ帝国皇帝の親戚筋ハンガリー王女エルジェーベトとして生まれ、4 歳の時に神聖ローマ帝国のチューリンゲン方伯家のヘルマン (ヘルマン 1 世の子) との政略婚約のためチューリンゲンへ。ヘルマンが夭折したためその弟ルートヴィッヒ 4 世と 14 歳で結婚し 3 児をもうける。20 歳のとき、夫ルートヴィッヒは第 6 回十字軍出征中にイタリアで病死。亡夫の弟たちに疎まれ、母子はヴァルトブルク城を追われた。貧民のような生活をしながら貧民や病人のために尽くし、24 歳の若さでドイツ中部ヘッセンのマールブルクで亡くなった。

エリーザベトの死の直後から彼女の墓に奇跡が起き始め、巡礼者が殺到する事態になって、1235 年教皇グレゴリウス 9 世はエリーザベトを列聖した。マールブルクには聖エリーザベト教会が建てられ街は巡礼者で栄えた。

ワーグナーの創作

ワーグナーはタンホイザー伝説のタンホイザーと歌合戦伝説のハインリッヒを同一人物とし、方伯ヘルマン 1 世夫人の代わりにエリーザベトを姪として配したと考えられる。ワーグナーは文献学者グリム兄弟が民間伝承を蒐集した研究資料「ドイツ伝説集」、タンホイザーとハインリッヒ・フォン・オプターディンゲンが同一人物であるという仮説を立てた G.L.T ルーカス論文、E.T.A ホフマンの「歌手たちの戦い」、その他「少年の不思議な角笛」、「チューリンゲン地方の伝説」などを参考にしたと思われる。



タンホイザー(マネッセ写本)



ヴォルフラム(マネッセ写本)



聖女エリーザベト(マールブルク)

歌劇の舞台

ドイツ中部テューリンゲン州の町**アイゼナハ**は、州都エアフルト、ヴァイマル（ワイマール）とともにテューリンゲン地方の代表的な観光地である。ゲーテ街道の町、J.S.バッハの生誕地、ルターが学んだ地としても有名。テューリンゲンの谷間にアイゼナハがあり、その片方の山にヴァルトブルク城が、反対側の近郊に伝説の山ヘルゼルベルクの山塊がある。

ヴァルトブルク城

アイゼナハの町を見下ろす世界遺産ヴァルトブルク城は、11世紀に建てられ、その後増築を繰り返した。ルターが新約聖書をドイツ語に翻訳した部屋、「歌合戦の広間」、壮麗な「祝宴の広間」などがあり、眼下にはテューリンゲンの森が広がる。

中世に建造されたヴァルトブルク城は荒廃していたが、19世紀はじめヴァイマル公国の宰相ゲーテの指揮で修復がはじまる。その後ロマン主義時代を経て、内装、絵画などは整備された。「エリーザベトの間」の豪華な壁面は20世紀になって聖エリーザベトの生涯をモザイクで飾ったのものである。



北西方向からみたヴァルトブルク城(ヘルゼルベルクは写真の左方向)

ヘルゼルベルク(ヴェーヌスベルク)

ヴァルトブルク城の東約10kmにある山塊ヘルゼルベルクはゲルマン族の女神ホルダ伝説の地。500m弱の頂上近く石灰岩の崖に「ヴェーヌスの洞窟」があることからヴェーヌスの山、ヴェーヌスベルクと呼ばれる。



アイゼナハ近郊のヘルゼルベルク山塊（南側） 「ヴェーヌスの洞窟」は左写真の左上、石灰岩の崖にある

究極のワグネリアン = ルートヴィッヒ 2世

バイエルン王ルートヴィッヒ 2世（1845 - 1886）は幼少からゲルマン神話や中世騎士伝説にはまり、王になってからは心酔していたワーグナーに異常なまでの支援をした。**バイロイト祝祭劇場**建築の莫大な費用のほとんどを援助したのもその一つである。ヴァルトブルク城を訪れて「歌合戦の広間」に刺激され、騎士伝説を具現化するため**ノイシュバンシュタイン城**を建造した。タンホイザーに囚んだ「歌人の広場」をメインに、執務室には歌劇「タンホイザー」の場面を描いた絵画を飾り、居間との間に「ヴェーヌスの洞窟」を再現した。居間には「ローエン格林」伝説にまつわる絵画を飾った。「狂王」と呼ばれ、「破滅的浪費」の末に1886年に不審な死を遂げる。



ノイシュバンシュタイン城の執務室



執務室に飾られているヴェーヌスとタンホイザーの絵画



執務室に続く「ヴェーヌスの洞窟」